

漂流記『うばらがはな』翻訳と解題(5)

崎 村 弘 文

(一九九五年十月十六日 受理)

A Document of Drifting, Ubaragahana:
Text and Bibliographical Notes (5)

Hirofumi SAKIMURA

支那日記

六月十八日午の刻斗に船にのりはて爰におちゐて船のやうをミるに大サ／百石もつミぬべく白木づくりにして丈長く柱一ツ立竹あミたる帆をうづ高／くつミおけり屋形を三間に設け又舳に水主なんどの立入るべき所を／しつらひ艚八挺をたて舳オモテに白木綿の幟を建て是に廣東公船と記し／舳トモに高張二ツ是にも又廣東公船としるしあり佐堂コトトシの乗りし船にハ／檣の上に黄なる木綿に香山縣左堂と記したる三尺四方の小幟をつけ／それに左堂はしめ次官シタツカサ從者凡て十人斗に水主十一人のり我等が船／にもマンテン官名なり文字しらす李農その次なる人にハ方伯多、温孝、開耕、賀琳(59才) 四人其餘ハ自隸二人水主十一人のり組ミ上の間に李農中の間に我等十三人／下の間に四人の次官ありて申の刻過ニ纜を解き川を上りへおし行く／兩岸人家まはら

につゞけり二十町余り行く北の方なる横川に入る此川も／廣さ一町にハあまりぬべし左右平地にて農家とおほしきが希に／建ち田畠多くて今六月の半バなるにはや稲を刈納るありまた秧を／うゑ付るありて見習れざるけしき也若きものども心づきなくこゝかし／こにミたりにゆバリしければ支那人叱りて舳の方にゆけとと、めつれど／ゆばりしきして俄にとゝむべうもなし此後ハ守らんと侘たりしに方伯多／紙にしるしたるものを出し示す打見れどもさだかに知られず舳に／ゆバリせよとの事とハ曉りぬそか書付をうつつしをけり(59ウ) 諸位兄台、但小便不可向正船、頭有神、船上以金頂外、即頭上、／金頂内、小便阿屎、無碍、／かくて程もあらで日くれければ燈灯に火を移しおし立つ折節風よかり／ければ帆を引あけて走る○十九日空晴夜明ければ両側人家多き／所に至る米油菜織などの字を板にしるし戸前イヘノマヘに高く／とさし上げ／たるハそれらをひさく家なるべし或ハ二階の窓に盆ハチに植たる蘭／を夥しく並べたるもあり又八十間

斗の家に太刀矛弓矢を描き彩イロトリ／したるありこれを関耕に尋ねたればこれらの業を教ゆる所となんいひし此所のはづれに牛に白を挽かせるあり傍に人もなく只牛のミ白の柄につなぎたるがおのれと打廻り／て挽なり爰を過ぎはるかに走り」(60才) 行ば三洲とかいふ地に至るこ、も人家夥しく立連ねてよき地方と見ゆ或ハ大なる家の前に高サ四尺斗土を富士形に筑マツき立るを白く塗／たる中に赤き圓相を多かきたるあり傍に藤の笠被りたる人出て我等が二艘の船をミて鉦を三聲打ければ此船の中ニも同う鉦を三ツ合せ／打ちやがてそこへ船をとゞめ左堂の船より次官一人陸にあかればかし／こよりも官人一人出来り問答のさまなりしがそのまゝ、帰り来り船を／やるこれハ往來の船を守る所なるべし此後にもかゝること多し 是舟番とおもはる 帆まきて走る／程に川幅ひろくなり日くれ頃に八十町余りなる所に出ぬ今宵ハ／こ、の川中に舟を泊る○廿日空晴帆巻て走るに此わたり船の／往來多けれど川幅廣く船行さ、ゆる事なしました公船てふ」(60ウ) 幟を見てハ傍によぎてそ通しける申の前にハいと大なる川に出たり／廣さハ三十町にもあまりぬへし兩側人家しげが中にも北の方ハわき／てミヤひかなりこ、にハ大船おびた、しうか、り居て指をかゞめて数へ／つくすべからす遠き國々の船また此國の船くさ／の船印おし立打交り／櫓は篠を立たるごとしそのほとりを小舟ひまなく往通ふそが中に／若き女十四五人或ハ二十人斗小舟にのせ男二人して櫓行きこ、の大船かし／この大船に女を送りやるさま我下の関のそ／うかのごとくしてからもやまと／も港内の有さま異ならずかくて我等が船共こ、をおし渡りて北なる岸／に舟をつなぎ左堂初め李農など打つれ陸に上り去れり方伯多四人／と我々船にとゞまり今宵ハこ、に泊る物見の舟ともおびた、しう出来り」(61才) つれと傍

近ふハ寄らざりけり○廿一日空晴今日も物見に出たり舟／多しそか中に長サ四間幅九尺斗の舟屋形をつくり戸障子ハ朱ぬりに金粉／蒔絵し左右の舷にあゆミを作りし上に植木鉢をならべ船の中ニハ男二人女四人／あり此中二人ハ遊女と覺しくて赤き衣に玉の簪さし飾り酒をくミつ、／物見するありこれらハ舟に住ミて外ニ栖をせぬものと温孝かたりき又／ほとり近く水に添ひたる楼にハ簾を捲て人多く詠めをるしバしありて／陸にあかるべしといふまゝ、に彼四人にいざなハれて船より上れば大路に人／多く立つどひて行べくも覚えぬを藤笠かつきたる人々そこら走り／廻り路を開きやう／くにしてたどり行く二十町あまりにて棟高く赤く／塗たる門の中へ入りぬ此門の奥大なる家あり二階をつくり設けいくつにも」(61ウ) へだてあり廣き所にハ正面に神ツメにも安置したる跡と覺しが案内し／行李のこりなく持來るマンテン李農またこ、に住む官人一人出てともに／くさ／く申掟すかの方伯多始四人は帰りけり茶を煎し出し菓子などす、め／しバしありて飯を持來る卓二脚に並べ七人と六人とに分れくらふ六菜の／もてなし也日くれければアンベラ棕櫚マツの席マツを持來り是を重ね敷く寝よと／いふ扱李農并こ、の官人云早帰るなれば用事あらば下に四人のものを／とゞめをけばそれにいふへし我等も日々來るべけれどて出行ぬやがて／燈を點ししバし物語してありしか思ひ／く打伏ぬマカヲよりこ、迄ハ／三十里余りなるへしと思はる○廿二日空晴此門の内ハ凡二反あまりの地／にて四方長屋ありて人も多く住めり我居る家に並びて小き家四ツ斗並建」(62才) てり本こ、は暹羅の貢館ヤギキにて香山縣正堂の預かり沙汰する所のよし／きのふ出たるこ、の官人もこれに隸ツキたる官にて朱佩璉とぞいふなる又かの／四人といふハこたび我等に附られ食料焚炊き給雜事をとり給

ふを人にて／柯晃朗鄭莆魏全顧愈といふ今日もかの朱佩璉関耕終日
来りて／つきをる李農もきたりしかどとく帰りに食事ハ一日に二度
して六菜／のそへものをつらね厚きもてなしなり○廿三日空晴賀琳
来りて一二日／逢ハざりしか旅の疲れハなきやと問ひやがて鉄の平
鍋大小三ツ南京／焼の蓋茶碗十五大椀八ツ茶のミ磁椀十五大盥二ツ
小盥三ツ木の赤／椽の角箸十三對團扇十三本烟草十三玉を持たせ来
り是ハ廣東府／給ハるむねを傳ふかたしげなきよしを厚く聞え
扱賀琳に向ていふやう」（62ウ）此ほと暑さ堪えかたうありしに
三四日このかた水にも入らで汗いふ／せく困したるに今日をりよく
盥給ハりたれば湯をかゝりたくこそぞ／あはれよきに沙汰し給ハれ
といへはうなづきていそぎ湯を沸らせ此家／のもの蔭にて汲せ置て
かしこにて心静にあびよといふこそ皆々悦び打／あび互に背をすり
かハし身中すか／となりて心地よさ類ひなし○廿四日空晴朝柯
晃朗錢一貫二百文許持て出来り我に授けていふやう／各の食料の費
として一日に一人前錢八分ツ、をマンテンより渡さるされど／八分
にてハ二度の米菜の費にえ足らず昨日迄ハ我等その不足を補ひ／調
したれとも此後ハその不足をつくのひかたければ今日よりしてはマ
ン／テンより渡さる、錢をそが儘に各に授くべければおのれと調し
した、め」（63オ）よといふ我／は東西をだにしらぬ外国人なれ
ばいかで物買すへもしるべき／食ことに六菜に限るべからず二菜に
てよかめればまげて調し給へと／いふに柯晃朗聞入れず誠に困じは
てさらはマンテンニつきて此よし／申さんとして柯晃朗をたのミ案内
として香山縣の驛亭カキヤに参り李農／に逢て此よしくハしう述べ二菜に
ても餘りあればそれにて四人の／かた／調し給ハるべく申させ給
へと申せば李農打笑ひうけかひぬ／此の日はかくむづかしくて昼ハ

るかに過て朝飯をくらひたり李農か／ハからひにて料の増しければ
にや此後も六菜をバ減ヘサさりき○廿五日空晴香山縣の驛亭カキヤへ参り
李農に逢てきのふねがひ申／せしをすミやかに命せ給ハりたれば彼
方にて物調シヤク、メツめられ我／」（63ウ）心安うかたじけなくこそあれ
とよるこび申のべて帰りぬ今日ハ方伯多／来り日くる、迨居たり○
廿六日空晴マニールンにてたびたる銀錢を／取出し一枚ツ、あたへ
是を柯晃朗にたのミ錢に換へたるに八百五十文／或ハ九百文斗にか
へて一やうならず一枚ツ、を秤にかけてその日の多少に／つれてた
がひありしなり○廿七日きのふ分ちあたへし錢もて酒肴を／買て
皆々のミくらひ或ハ双六の賭カケモノなどしはては物あらかひに至り／
かまひすしことも愚なりゆるやかに物とらすれば酒のミてくるひさ
／わき物とらせすきびしうもてなせばふくれひがみつかがさが／
兎に角につきてこうしはてたり○廿八日空晴こ、の内に住ける／人
馬をのり走らし太刀つかふ業をしゆるありこの頃ハ人々になれて
（64オ）かしこにゆきみる又玉瑪ママ脳珊瑚マサなどすり珠数マツに作り或は
十字／形につくりなすあり是をマカラへ遣し物に交るとなんこは市
人ならねバ／皆公のいとまある時に私に物する手業なるへしくさ
／／につくり／なしたるを出し見せ賣らまほしきけしきなれば帛珀
の別子ネズケ一ツ／買とりぬ○廿九日空晴鄭莆きたりそこら近きあたり物
見／に行んといふ我と竹三郎跡にと、まりて餘ハとも／／に出行ぬ
○晦日／○七月朔日空晴此二日共に事なし○二日空くもる朱佩璉李
農／来りて近き中に暹羅國シヤムロの進貢使こ、に入り来るなれば次なる
小キ／家に移るべしといふ今にしも移らバやといふに明日なん移り
てよけん／かの柯晃朗とハかりよきやうに沙汰すべしといひて去り
ぬ夕方に」（64ウ）なりて八五郎留吉長十郎竹三郎万助など双六

のたハむれよりして／物あらかひしてやまず重五郎扱ひて静りぬ夜
 に入て鄭莆来李農より／おこせしとて文字しるしたるもの一枚をわ
 たす何なりけんさととり得ず／鄭莆に問へハ爰ニ有間ハ心して物騒な
 せそとの事なりといひぬ／頓て矢立とり出してそ写しぬ／現奉／委
 員太爺吩咐、你出入行公洗面、雖要小心攢緊／不可忙速、我們突得
 心安請問、兄臺在貴／處被風失水船往、廣東香山縣左堂來省請／示
 兩廣總大人恩准、飭委員、護送回藉」(65才) 辨原作办辨 署字 今你在暹羅貢
 住南二縣辨理／事三思安然無處／氣壹忍何等請問／○三日大雨ふ
 る巳マの刻にハ晴たり柯晃朗鄭莆その餘の人々来／雨やミたれば隣な
 る家に移るべしとて荷物持運びて共に力を併／わすかの四人も共に
 移れり居りし跡を掃き清めなんどするに昼過／る比にハ事はてたり
 暹羅の貢使明日なん爰に入り来るとてゆふ／くれ魚鳥野菜など持
 来りいかめしくひしめきあへりおのれ十二人／のものにいふは暹羅
 貢使来りなバ定て大勢なるべければ各／心して万づ物静にもてなす
 へし夷等の心もはかりしらねバもし彼」(65ウ) 等に向てふしぎの
 ふるまひし支那の人々にわづらひをかけたらんハ／口惜く面ふせな
 れバわきてつゝしミあれといひ聞せ重五郎へハことさら／心を配り
 て餘のものを何事なうあらしむべくこそとせちに示し置く／○四日
 大雨ふる朝とく李農朱佩璉その外爰に住ける程の官ツカ／多く出て
 さま／の事沙汰せらる巳の初に貢丈入り来る折ふし／雨しきりに
 ふりければ五十人斗の暹羅人雨衣をかけ傘さすもあり／竹笠被れる
 もあり貢使は門の内へ轎にて入り館の際にて轎を下り／たり物さわ
 かしき事いふ斗なしかくてゆふくれ前になりて貢館／より李農人し
 ておのれを呼におこしける羽織引かけて参りけるに／李農待うけて
 二階に伴ひ行く貢使は腰かけにかゝり前に大なる」(66才) 丸き机

を置きそが傍にこしかけいくつもならべあり支那人黒ぬりの板に白
 く暹羅國大人と書たるを持出しおのれに示しける扱李農か／紹介に
 て大人に引合せければ大人手を挙げ何か詞をかけるおのれも／
 す、ミて今日こゝに着給ふことほきをのべ終りかたハらの腰かけに
 か、れと／李農がす、めによりて大人の向なる腰かけにかゝりぬ大
 人と李農物語／してある中に暹羅人茶碗をこし高の臺にのせて茶を
 持来る又／美しき磁盆に橙の大なるを切てつミのせ机の上にをく大
 人はを取て／あたへらる美味ヨキアチなり枸櫞マルフェンユカンのごとししバしありて大
 人奥の方を指し／カツボンキンコといひつゝ、立れければその跡につ
 き行ミるに長サ四尺丸ミ／二尺五寸斗の細く長く枕のさまに五色の
 織ものにて袋を造りたるを」(66ウ) 開きて見せらる我國のキンコ
 よりハ大きなるが多く入りたり其外に／三尺斗なる象牙五十本烏犀
 角五本孔雀の尾二把ニ尺廻り錦鶏の如／き鳥腹をひらき乾したるもの五
 十羽うつくしう粧ひ作りなしたる箱／十四五あり此中にハ何を入れ
 けんしらず此外色々のやきもの多くあり／皆毛氈を布くその上に並
 らへ置けり見はて、本の腰かけに帰りぬれば／暹羅の次官シツカサ七人出
 来りてたいめすはや日もくれければ暇告けて帰り／けり此大人のて
 いたらく呂宋のごとく髪を五分斗につミまハし服も／呂宋のごとく
 花田ハナタの羅紗の衣に白き毛織の股引の如きをはき／水晶の珠数ツマダをかけ
 たり此次の官人七人より以下ハ項の前の方三寸斗の丸／さに毛を残
 して短く切り其餘をば剃り服は次官ハ黒羅紗に白き股引」(67才)
 のゆるきを着毛の帽子を着き賤き者ハ木綿の服に同しく頭なりの帽
 子／を被り皆皮沓をはきたり 按にシヤムロ人が頂上に髪を剃り残したる
 事ハ宗心が記又宇治甚助が記にも見えたりすべて／丈
 高く色黒く皆首に珠数ツマダをかく詞ハカ、ヤンに似たるもま、あり此等
 の／人々ハ自國の船にて此港に入り来りしよしなり 按に暹羅は蛮名スイヤン
 又シヤムロといふ坤輿

／圖説に載たる古ノ赤土国一名波羅又唐書の羅國續文獻通考の暹羅國といふ／是なり或人云其地漢の赤信の遺種にて占城の西南にあり氣候正からず俗尚倭／し掠む今清に奉貢すと云云又西洋紀聞ニ云古の時暹羅と羅刹と二国ありしが元の至心ノ頃暹羅人暹を併せて一国となせりスイヤム又シヤムともいふは即暹の番音なり／其地南方に在て氣候甚熱くたゞ冬月に至る時稍涼し其人螺髻髻鬚悦を／用ひて腰を束ぬその産する所の物ハ菓物皮角なり按之本朝慶長年間其國／始めて通す元和寛永の間其王しきりに金葉の書を奉りて聘問す今におひての類々／その人又我國の執政に書聘を通したりきそれらノ子孫猶今もその國にありといふ云白石が我が國の人暹羅の王臣になりしといはれ／しハ山田仁左衛門ケ事ならぬ宗心が記に云天竺にて山田仁左衛門と申は暹羅國ノ王となりて日本より御朱印を改められき此人の生國は勢州山田の人なり御師の一（67ウ）代官にて江戸へ下り何やらんいたつらなる事仕出し御吟味の宿とせられつる木下六右衛門は日本ノにて三百石ばかり取られし／も軍陣の事ありて王にたのまれ／軍を發せしに能働して手から有しゆを國王ノ御師となりて暹羅國へ渡る此時し侍の由天竺にて帝王の御審所をつとめ大納言の位のよし／云々又智原宗因が暹羅紀事ニ山田仁左衛門其子オイ／ンが事をす宗心がいふ処と／少し異なり智原宗因ハ暹羅の日本町に有りしものなれば是をまされりといすべし事長ければ其文をあけずこれらハこゝに用なき事なれと只暹羅のちなみに／書つらねつるなり又暹羅と眞／蠟とハ字音のひとしけれハ／ツ國なめりと思ひ居たるに／それらハあらで眞蠟一名占蠟 東埔塞 漢雨塞 眞／李智、敦補只、甘波牙などいひ／我俗ハカボ ○五日空晴我等に附られし四人りの人々日毎に信実にもてなしくま／く迄心を尽し厚くふるまいける中／に柯晃朗はわき／て心さま直に正しく何くれとおのれ等が為よくは／からひくれけるにそ行李を開き木綿四反取出て手巾の料にし給へと／贈りければ悦びあへり／○六日空晴る○七日空晴る事なし○八日空／晴登過て柯晃朗来り（68オ）茶を喫に行かんといふにぞ竹三郎と／三人打つて出ける市肆の体路幅／廣く中央にハ石をしきつゞけ兩／側瓦屋高く白壁つくり立つらね二階の／窓に硝子を張り商人の店／ハ土間もあり石を敷或ハ板敷たるもあり各床を／ならへ其上に賣る／ものをつらね傍に若き男の算盤を取り腰かけにかゝり／居る兌換／舖ハ錢をつミ錢を数へ串につらぬきなどすれば古衣店は衣を／緋／て打見或ハ之ミつ、おく烟草家ハ葉を重ね或ハ梨木に挟ミて鉗に／て／削り谷店ハ春つく音高し織店ハ五色なる織物をつらね薬舖ハ赤／き／板に金にて薬の字書きたるをか、ぐ木偶袋物革類扇金物書物軸／物いづれ／いひ盡すべからず毎にさま／くの物を並べ置き打ミる／ま、に物ほしく覚ゆ／江戸日本橋通りを行くこゝ、地す又所々に大な／る堂あり内にハ金の仏像を安置（68ウ）し香案花鬘いかめしうそ

なるあり五六丁行けるに或家に入る店にハ爪／茄など凡て／菜類をつらねありしかたはらを入り梯を挙げ二階に上れば／人多／く来りゐて三尺あまりの丸机いくらも出し置その傍に腰かけを五ツ／六ツづ、机ごとにをく各それにし打かくれば若き男錫の瓶に茶／入たる／を提け来り茶を注ぎ廻る机の上には種々の菓子あるを己が／好ま、に／取りくらひて茶を飲ミつ、見るに壁には行草の文字かき／たる軸物を／多く掛たる中に我國の仮名の軸物もありけりや、しハ／らく休らひ心の／ま、に茶のミ菓子くひてはや帰らんといへば柯晃／朗かの若き男を呼何か／さ、やきければ彼男机の上をつく／見て／云云といひぬ柯晃朗やがて／錢百五十文出してとらせぬ此茶楼ハ男／斗にて女をハ出さず又入来る（69オ）ものも女ハ一人もなかりき／此家を出てかしこ爰逍遙て帰りぬ○九日／空晴朱佩璉蘇晃と共に来／り竜眼の枝つきたると椰子とを惠まる此／蘇晃てふハ武官にて馬の／り太刀つかふ業を教ゆる人なり○十日空くもる／ゆふ暮より大雨ふ／り北風烈く吹く○十一日空くもる今日ハ暹羅の貢使／貢物を府城に／進らすとて朝まだきより人多く入来る巳の刻斗りに／喇叭の聲太鼓／の音しければ今ならめとて出て見る表なる門をおし／開き太き竹を／二ツに割りて赤漆にぬりたるを二ツ真先に掲げ二尺四方斗／四角な／る朱塗の牌二つに金粉以て進貢と書たるを立て次官一人毛織／の黒／き帽子に水晶の珠数かけ青く黄に綾ある衣の袖細く裾長く／我國の／長合羽といふ物に似たるを着白羅紗の袴に黒き皮の深沓ハ（69ウ）／き黒漆の轎の中に腰かけ昇夫四人にか、せ従者四五人従へり其次に／三尺／四方高サ四尺斗四方廂の轎凡べて朱ぬり金粉にて雲鶴描き／たる中に／小き赤色の机案を設け其上に長サ二尺幅一尺斗なる黒き／木の高彫し／たる箱に銀多く鏤たるをのせ輿夫二人にか、せこは

